



# Cisco Prime Collaboration Assurance レポート

---

このセクションでは、次の点について説明します。

- [Cisco Prime Collaboration Assurance レポート \(1 ページ\)](#)
- [Cisco Prime Collaboration Assurance レポートを生成するための前提条件 \(2 ページ\)](#)
- [コール詳細レコード NAM クレデンシャルの更新 \(2 ページ\)](#)
- [コール分類 \(9 ページ\)](#)
- [SFTP 設定項目の設定 \(21 ページ\)](#)
- [管理レポート \(26 ページ\)](#)
- [CDR および CMR のコール レポート \(27 ページ\)](#)
- [NAM & Sensor Report \(42 ページ\)](#)
- [セッション レポート/会議レポート \(52 ページ\)](#)
- [TelePresence エンドポイント レポート \(54 ページ\)](#)
- [\[CUCM レポートの起動 \(Launch CUCM Reports\)\] \(56 ページ\)](#)
- [その他のレポート \(56 ページ\)](#)
- [スケジュール済みレポート \(62 ページ\)](#)
- [2,000 件を超えるレコードを含むレポートのデータへのアクセス \(65 ページ\)](#)
- [ファイルのダウンロードに関する問題のトラブルシューティング \(66 ページ\)](#)

## Cisco Prime Collaboration Assurance レポート

この章では、Cisco Prime Collaboration Assurance レポートのさまざまなレポートについて説明します。

# Cisco Prime Collaboration Assurance レポートを生成するための前提条件

Cisco Prime Collaboration Assurance レポートを使用すると、問題領域を特定し、最も頻繁に使用されているエンドポイントと使用頻度の最も少ないエンドポイントを特定して、将来の展開に必要な場所とエンドポイントの種類を判断できます。

前提条件：

- データソースのクレデンシャルを更新します。「[コール詳細レコードNAMクレデンシャルの更新](#)」を参照してください。
- (ボイスコールレポート用の) コールを分類し、ダイヤルプランを追加して、ゲートウェイコードを設定します。「[コール分類](#)」を参照してください。
- SFTP を設定します。「[SFTP 設定項目の設定](#)」を参照してください。
- Unified CM デバイスは、Managed の状態である必要があります。
- Cisco Prime Collaboration Assurance を、Unified CM で課金サーバとして追加する必要があります。

## コール詳細レコード NAM クレデンシャルの更新

Cisco Prime Collaboration Assurance は、Cisco Unified CM clusters または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) から、SCS (損失が 5% を超えた秒数) コールの音声品質がユーザ定義の品質しきい値を満たしていない場合は、SNMP トラップを送信します。

Cisco Unified CM は、Cisco Voice Transmission Quality (CVTQ) アルゴリズムを使用して、コール全体の MOS 値を計算します。コールの終了時に、Cisco Unified CM はコール詳細レコード (CDR) と Call Management Records (CMRs) にデータを保存します (CDR と CMR の詳細については、『[Cisco Unified Communications Manager コール詳細レコードアドミニストレーションガイド](#)』を参照してください)。

Unified Communications Manager パブリッシャ サーバにクレデンシャルを提供するには、次の手順を実行します。

- Cisco Prime Collaboration Assurance にクレデンシャルを提供する。
- クレデンシャルを最新の状態に保つ (Unified Communications Manager パブリッシャ サーバのクレデンシャルを更新するときは常に、Cisco Prime Collaboration Assurance の対応するクレデンシャルも更新する)。

クレデンシャルを更新するには、[CDS ソース設定 (CDR Source Settings)] > [通話品質データソース管理 (Manage Call Quality Data Sources)]。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

クレデンシャルを更新するには、[アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDS ソース設定 (CDR Source Settings)] > [通話品質データソース管理 (Manage Call Quality Data Sources)]。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

クレデンシャルを更新するには、[インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)] を選択します。

## Prime NAM へののクレデンシャルの追加

Prime NAM サーバにクレデンシャルを追加するには、次のようにします。

**ステップ 1** 選択 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [CDR Source Settings] > [Manage Call Quality Data Sources]。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDS ソース設定 (CDR Source Settings)] > [通話品質データソース管理 (Manage Call Quality Data Sources)]。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

移行方法 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)]。

**ステップ 2** [追加 (Add)] をクリックし、必要なデータを入力します。ここでは、すべてのフィールドが必須です。

**ステップ 3** [OK] をクリックします。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

[保存 (Save)] をクリックします。

(注) ホスト名または IP アドレスを、指定された形式で入力してください。ホスト名は必ず IP アドレスで解決可能でなくてはなりません。解決可能でない場合は、エラーメッセージが表示されます。[NAM の設定 (Configure NAM)] ウィザードには、NAM 設定の [ステータス (Status)] が、[ステータス理由 (Status Reasons)] と共に表示されます。ステータスには、成功、検証、および失敗があります。

**ステップ 4** [更新 (Refresh)] ボタンをクリックすると、クレデンシャルの情報がユーザインターフェイスに反映されます。

クレデンシャルを編集または削除するには、選択したクレデンシャルのチェックボックスをオンにしてから、[編集 (Edit)] または [削除 (Delete)] をクリックします。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

[更新 (Refresh)] アイコンをクリックして、最新の NAM クレデンシャル ステータスを表示します。

クレデンシャルを編集するには、選択したクレデンシャルのチェックボックスをオンにして、必要な変更を行います。

(注) [選択数/<行の合計数> (Selected count/<total number of rows>)] : 選択した行数を、テーブルの行の合計数で割った値が表示されます。

---

## 複数の Prime NAM クレデンシャルの削除

---

ステップ1 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)] の順に選択します。

ステップ2 選択したクレデンシャルのチェックボックスをオンにします。

ステップ3 [Delete] をクリックします。

選択した NAM を削除するかどうかを確認するメッセージがポップアップ表示されます。

(注) NAM の削除中にエラーが発生した場合は、ログを確認します。

---

## 複数の Prime NAM クレデンシャルの確認

---

ステップ1 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)] の順に選択します。

ステップ2 クレデンシャルを確認する NAM を選択します。

ステップ3 [Verify (検証)] をクリックします。

(注) NAM が [Verifying (Verifying)] 「」の状態にある間は、NAM を [検証 (Verify)] または [削除 (Delete)] できません。NAM を検証または削除しようとする、NAM が [Verifying (Verifying)] 「」の状態にあるときに NAM のクレデンシャルを削除または検証できないことを示すメッセージが表示されます。

---

## 複数の NAM クレデンシャルの追加

複数の NAM クレデンシャルを追加するには、Prime NAM の詳細を含む CSV ファイルをインポートします。

CSV (コンマ区切り値) 形式は、スプレッドシートとデータベースの最も一般的なインポートおよびエクスポート形式です。

CSV ファイルの準備

CSV ファイルは、デフォルトの Microsoft Excel スタイルの CSV ファイルに基づいています。CSV ファイルには、それぞれに多数の列がある、多数の行が含まれています。フィールドはコンマで区切られており、コンマや改行など、文字どおり処理する必要があるコンテンツは引用符で囲みます。

#### CSV ファイルの要件

CSV ファイルには、「よく整えられた形式」以外にも、次の要件があります。

各 CSV ファイルには、1つのヘッダー行があります。

CSV ファイルをインポートする場合は、CSV ファイルのヘッダー行を使用して、CSV ファイルの 2 行目以降のデータをデータベース内のフィールドにマップする方法を決めます。

ヘッダー行は、区切り記号（各列を区切るコンマを除く）を含めないようにする必要があり、これを行わないとインポータが正しく機能しない場合があります。

CSV は、6 ヘッダーと 7 ヘッダーの 2 種類のヘッダー ファイル形式をサポートしています。

- 12.1 以前のバージョンでは、ホスト名と IP アドレスが 2 つの異なるフィールドであったため、7 ヘッダー形式になっていました。
- 12.1 Service Pack 3 では、1 つのフィールドでホスト名と IP アドレスの両方をサポートするため、6 ヘッダー形式になっています。

CSV ファイルには、各 Prime NAM サーバで次の詳細情報を含める必要があります。

HostName を含む 6 ヘッダー ファイル形式の CSV

DisplayName	HostName	プロトコル	ポート	ユーザ名	Password
nam	nam.atlas.local	HTTP	80	admin	Atlas!123

IPAddress を含む 6 ヘッダー ファイル形式の CSV

DisplayName	IPAddress	プロトコル	ポート	ユーザ名	Password
NAM	10.104.243.11	HTTP	80	admin1	Nam!123

12.1 Service Pack 3 以降では、NAM のインポートでは 6 ヘッダー ファイル形式の使用が推奨されています。11.6 以前のバージョンでインポートされたファイルがある場合、同じヘッダー ファイルは 12.1 Service Pack 3 以降のリリースで再度使用することができます。



- (注)
- 行が空白のままであり、各レコードが 1 行になっていることを確認します。
  - 先頭と末尾の空白文字は無視されます。
  - 改行が埋め込まれています。
  - ホスト名は IP アドレスへと解決できる必要があります。

## Prime NAM クレデンシャルのインポート

- ステップ 1 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)] の順に選択します。
- ステップ 2 [NAMのインポート (Import NAM)] セクションで、[ファイルの選択 (Choose File)] ボタンをクリックしてローカルの csv ファイルを参照し、[インポート (Import)] をクリックして、NAM を CSV 形式でインポートします。
- ステップ 3 [インポート (Import)] をクリックします。
- ステップ 4 [更新 (Refresh)] アイコンをクリックして、最新の NAM クレデンシャル ステータスを表示します。
- ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

### クレデンシャル検証：エラー メッセージ

次の表は、クレデンシャル検証のエラー メッセージです。これらのメッセージは、NAM インポートの一部として導入されました。

成功/エラー メッセージ	状態	解決策
IMPORT_PROCESS_SUCCESS_MESSAGE	すべての NAM レコードが正常にインポートされました	成功メッセージ

成功/エラー メッセージ	状態	解決策
IMPORT_PROCESS_SKIPPED_FEW_RECORDS	次のいずれかの原因により失敗しました。	
	1. 「すべての NAM レコードが正常にインポートされませんでした。レコードのホスト名を解決できませんでした。インポート ファイルを確認してください。問題が解決しない場合は、ログを確認してください」。	
	2. 「すべての NAM レコードが正常にインポートされませんでした。レコードの IP アドレスを解決できませんでした。インポート ファイルを確認してください。問題が解決しない場合は、ログを確認してください」。	
	3. 「すべての NAM レコードが正常にインポートされませんでした。レコードのホスト名または IP アドレスを解決できませんでした。インポート ファイルを確認してください。問題が解決しない場合は、ログを確認してください」。	
IMPORT_PROCESS_FAILURE	「すべての NAM レコードが正常にインポートされませんでした。インポート ファイルを確認してください。問題が解決しない場合は、ログを確認してください」。	重複するものがないか確認し、IP アドレスなどの正しいデータを入力します。
INCORRECT_FILE_FORMAT	「インポートされたファイルの形式が正しくありません。正しい形式についてはユーザガイドを確認し、ファイルを CSV 形式のみでインポートしてください」。	ファイルを CSV 形式でのみインポートしてください。

成功/エラー メッセージ	状態	解決策
IMPORT_FILE_ HEADERS_EMPTY	「ファイル ヘッダーが正しくありません。正しい形式については、ユーザ ガイドを確認してください」。	正しいヘッダーを含むファイルを選択してください。
IMPORT_FILE_ CONTENT_EMPTY	「インポートされたファイルのコンテンツが空であるか、適切ではありません。正しい形式については、ユーザ ガイドを確認してください」。	NAM データを入力してください。

## NAM クレデンシャルを使用した問題のトラブルシューティングとクレデンシャルの確認

Cisco Prime Collaboration Assurance に問題が発生し、NAM にコンタクトまたは接続できなくなると、コールデータと設定データの収集や分析が中断される場合があります。その場合は、次を行ってください。

- クレデンシャルが有効であり、Cisco Prime Collaboration Assurance がアクティブにデータを取得していることを確認します。
- NAM のクレデンシャルステータスやレポートに問題（時間差が著しいなど）があると思われる場合は、トラブルシューティングを行ってください。

**ステップ 1** 次のトラブルシューティングを行います。

Cisco Unified CM の場合: 次の操作を実行します。

- Cisco Unified CM のクラスタのクレデンシャルが、Cisco Prime Collaboration Assurance のクレデンシャルと一致し、（必要に応じて）正しいことを確認します。
- DNS パラメータが Cisco Prime Collaboration Assurance サーバで正しく指定されていること、および Cisco Unified CM ホスト名が DNS に追加されていることを確認します。（Cisco Prime Collaboration Assurance は、正しい名前を取得するために、Cisco Unified CM の IP アドレスを解決できる必要があります）。
- クラスタと Cisco Prime Collaboration Assurance の間で、正常なデータ交換を妨げる既知の問題があるかどうかをチェックします。
- この問題は、Cisco Prime Collaboration Assurance と Cisco Unified CM の間の接続が切れた後に、再度確立した後で発生する可能性があります。Cisco Unified CM は、最初に古いファイルを Cisco Prime Collaboration Assurance に送信します。
- Cisco Prime Collaboration Assurance が依存しているクレデンシャルは、Cisco Unified CM プラットフォームで変更される可能性があります。この問題が発生した場合は、Unified CM の管理者に問い合わせ、



正しいクレデンシャルを取得してください。必要に応じて、Cisco Prime Collaboration Assurance でクレデンシャルを更新します。

**ステップ 2** クレデンシャルを確認します。

- a) 移行方法 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [CDR ソース設定 (CDR Source Settings)] > [通話品質データソース管理 (Manage Call Quality Data Sources)]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

移行方法 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDS ソース設定 (CDR Source Settings)] > [通話品質データソース管理 (Manage Call Quality Data Sources)]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合**

[インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [NAM の設定 (Configure NAM)] の順に選択します。

- b) クレデンシャルを確認する NAM を選択します。  
c) [Verify (検証)] をクリックします。

## コール分類

Cisco Prime Collaboration Assurance では、コール分類を使用して、コール詳細レコード (CDR) レポートのコール进行分类します。

Cisco Prime Collaboration Assurance は、次のデータを分析して、コールがシステム定義のコール カテゴリに該当するかどうかを判別します。

- CDR からの詳細
- ソース エンドポイントとターゲット エンドポイントのデバイス タイプ。
- コールの方向 (着信または発信)
- プロトコル (H.323、MGCP、または SIP)



(注) 7 日より古い CDR レポートはページされます。

次の表では、コールカテゴリのタイプと名前の一覧を示し、各カテゴリタイプに含まれるコールについて説明します。

カテゴリ タイプ	説明	カテゴリ名
----------	----	-------

ボイスメール	ボイスメールとの間でのコール。	<p>Unity Voicemail : ボイスメールコールのシステム定義基準を満たすコール。Cisco Unity や Cisco Unity Connection との間で送受信されるコールなどが該当します。</p> <p>(注) このカテゴリタイプにユーザ定義のカテゴリ名を追加することができます。</p>
会議	会議システムとの間で送受信されるコール。	<p>Conference Bridge : 会議ブリッジを使用するコールのシステム定義基準を満たすコール。</p> <p>(注) このカテゴリタイプにユーザ定義のカテゴリ名を追加することができます。</p>
ICT	クラスタ間トランク (ICT) との間で送受信されるコール。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ICT GK Controlled : ゲートキーパーにより制御される ICT コール。</li> <li>• ICT Non-GK Controlled : ゲートキーパーにより制御されない ICT コール。</li> </ul>
VG/Trunk-Outgoing	<p>音声ゲートウェイまたはトランクへのコール。オフネットコールのみが対象となります。</p> <p>(注) ユーザ定義ダイヤルプランは、VG/Trunk-Outgoing コールカテゴリのコールに適用されません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• MGCP Gateway Outgoing : MGCP 音声ゲートウェイへのコール。</li> <li>• H.323 Gateway Outgoing : H.323 音声ゲートウェイへのコール。</li> <li>• H.323 Trunk Outgoing : H.323 トランクへのコール。</li> </ul> <p>SIP Trunk Outgoing : SIP トランクへのコール。</p>

VG/Trunk-Incoming	音声ゲートウェイまたはトランクへのコール。オフネットコールのみが対象となります。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• MGCP Gateway Incoming : MGCP 音声ゲートウェイからのコール。</li> <li>• H.323 Gateway Incoming : H.323 音声ゲートウェイからのコール。</li> <li>• H.323 Trunk Incoming : H.323 トランクからのコール。</li> </ul> <p>SIP Trunk Incoming : SIP トランクからのコール。</p>
Tandem	タンデム コールは、両方のエンドポイントが音声ゲートウェイまたはトランクである場合に発生します。	Tandem
OnNet Trunk	一方のエンドポイントがトランクであり、オフネット コールではないコール。 たとえば、トランクは Webex または PBX への接続に使用することができます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• OnNet H.323 Trunk。</li> <li>• OnNet SIP Trunk。</li> </ul>
内部	上記のどのカテゴリにも該当しないコール。たとえば、一方のエンドポイントが IP フォンで、もう一方のエンドポイントが音声ゲートウェイであり、オフネット コールではないコールなどが該当します。	内部。
不明	システム関連の理由により、Prime Collaboration でエンドポイントのデバイス タイプを特定できませんでした。	不明。

次のような場合、Cisco Prime Collaboration Assurance は、ユーザ定義のコール カテゴリにコールを配置します。

- コールがすでに内部、VG/Trunk-Outgoing、または OnNet Trunk コールとして分類されている。
- ユーザ定義ダイヤル プランがコールが発生したクラスタに割り当てられている。

## OffNet および OnNetNet コールを理解する

少なくとも一方のエンドポイントがゲートウェイまたはトランクで、そのエンドポイントが次のいずれかを満たす場合、コールはオフネットと見なされます。

- [Call Classification] パラメータは、Unified CM（管理）のゲートウェイ設定またはトランク設定で OffNet に設定されています。
- Unified CM では、次の両方の条件を満たしています。

[Call Classification] パラメータがゲートウェイの設定またはトランクの設定で [System Default] に設定されている。

[System Default] サービス パラメータが [Offnet] に設定されている。

- エンドポイントがアナログ ゲートウェイである。

オフネット コールの基準を満たさないコールはすべてオンネット コールと見なされます。

## コール カテゴリの作成

ダイヤル パターンをダイヤル プランに追加するときに、コール カテゴリ名を作成することができます。

コール カテゴリを追加するには、次のオプションを選択します。[CDR分析の設定（CDR Analysis Settings）]>[コールカテゴリの設定（Set Call Category）]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームとレポートの管理（Alarm & Report Administration）]>[CDR分析の設定（CDR Analysis Settings）]>[コールカテゴリの設定（Set Call Category）]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

コールカテゴリを追加するには、[アラームとレポートの管理（Alarm & Report Administration）]>[CDR分析の設定（CDR Analysis Settings）]>[コールカテゴリの設定（Set Call Category）]を選択します。

Cisco Prime Collaboration Assurance では、いくつかの定義済みのコール カテゴリのセットがサポートされています。これらは、Cisco Prime Collaboration Assurance でコール カテゴリがどのように使用されるかを決定するものです。

定義済みのコール カテゴリのセットには、Unity ボイスメール（Unity Voicemail）、ローカル（Local）、長距離（Long Distance）、国際（International）、緊急（Emergency）、サービス（Service）、および無料通話（Toll Free）があります。

## カスタム コール カテゴリの作成

Cisco Prime Collaboration Assurance では、カスタム コール カテゴリを作成することもできます。

- ステップ 1 [アラームとレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [コールカテゴリの設定 (Set Call Category)] の順にクリックします。
- ステップ 2 [追加 (Add)] をクリックして、カスタム コール カテゴリを作成します。テーブルの最後に新しい行が表示されます。
- ステップ 3 ドロップダウンから [コールカテゴリの種類 (Call Category Type)] を選択します。
- ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

新しいコールカテゴリを作成して、そのチェックボックスをオンにすると、既存のコールカテゴリを変更したり、複数のチェックボックスをオンにして、コールカテゴリを [削除 (Delete)] したりできます。

## ダイヤル プランの追加

ダイヤルプランには一意の名前が必要です。フリーダイヤル番号のセットを登録することもできますが、ダイヤルパターンのセットを必ず登録する必要があります。ダイヤルパターンではコールカテゴリの名前とタイプが識別されています。ダイヤルパターンで指定されているルールまたはパターンと電話番号が一致すると、コールは該当するカテゴリに分類されます。

Cisco Prime Collaboration Assurance では、デフォルトのダイヤルプランが提供されます。これを基にして、独自のダイヤルプランを定義できます。デフォルトダイヤルプランには、デフォルトのダイヤルパターン (コールカテゴリの名前、タイプ、ルール) があります。ダイヤルプランを設定すると、デフォルトのダイヤルプランで指定されたルールの追加、変更、および削除を行うことができます。

ダイヤルプランは複数作成することができます。1つのクラスタに割り当てることができるダイヤルプランは1つだけですが、同じダイヤルプランを複数のクラスタに割り当てることができます。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以前の場合

ダイヤルプランを追加するには、次のオプションを選択します。。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

ダイヤルプランを追加するには、次のオプションを選択します。 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR 分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤルプランの設定 (Dial Plan Configuration)]。

ダイヤルプランを割り当てするには、次のオプションを選択します。 [アラームおよびレポート管理 (AlarmおよびReport Administration)] > [CDR 分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤルプランの設定 (Dial Plan Configuration)]。

## デフォルトのダイヤルプランを理解する

ダイヤルプランの追加時に、デフォルトダイヤルプランのコピーが表示され、更新できるようになります。次の操作を実行できます。

## デフォルトのダイヤルプランを理解する

- 既存のコール カテゴリ名から選択する。
- ダイヤルパターンを追加、更新、または削除する

**Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合**

- 既存のコール カテゴリ名から選択する。
- ダイヤルパターンを追加、更新、または削除する

ダイヤルプランの設定中の変更は、デフォルトダイヤルプランには影響しません。デフォルトダイヤルプランは北米番号計画（NANP）に基づいています。

次の表に、デフォルトのダイヤルプラン値を示します。

状態	文字数	デフォルトパターン	コール カテゴリ名	コール カテゴリタイプ	説明	プライオリティ
>	3	011!	国際	国際	ダイヤルされた番号が3桁より長く、011で始まっている場合は、このコールは「国際」として分類されます。	1
=	7	!	ローカル	ローカル	ダイヤルされた番号が7桁で、パターンが！（1桁以上、この例では7桁の番号）の場合、このコールは「ローカル」として分類されます。	2

=	10	T!	トールフリー	トールフリー	ダイヤルされた番号が10桁で、パターンが T! (1桁以上、この例ではダイヤルプランで定義されているフリーダイヤル番号のいずれかで始まる10桁の番号) の場合、このコールは「トールフリー」として分類されます。	3
=	10	G!	ローカル	ローカル	ダイヤルされた番号が10桁で、パターンが G! (1桁以上、この例では Cisco Prime Collaboration Assurance で定義されているゲートウェイコードで始まる10桁の番号) の場合、このコールは「ローカル」として分類されます。	4

=	10	!	長距離	長距離	ダイヤルされた番号が10桁で、パターンが! (1桁以上、この例では10桁の番号)の場合、コールは「長距離」として分類されます。	5
=	11	T!	トールフリー	トールフリー	ダイヤルされた番号が11桁で、パターンがT! (1桁より長い。ここでは、ダイヤルプランで定義されているフリーダイヤル番号のいずれかで始まる11桁の番号)の場合、このコールはToll Freeとして分類されます。	6



=	11	XG!	ローカル	ローカル	ダイヤルされた番号が 11 桁で、パターンが XG! (1 桁以上、この例では任意の数字 1 文字で始まり、Cisco Prime Collaboration Assurance で定義されているゲートウェイコードが続く 11 桁の番号) の場合、このコールは Local として分類されます。	7
=	11	!	長距離	長距離	ダイヤルされた番号が 11 桁で、パターンが ! (1 桁以上、この例では 11 桁の番号) の場合、コールは「長距離」として分類されます。	8



(注) Cisco Prime Collaboration Assurance では、クラスタに割り当てられているダイヤルプランでフリーダイヤルコードが定義されている場合、コールが「トールフリー」として分類されます。

## ダイヤル プランにダイヤルパターンを追加

追加または編集するダイヤルパターンを、ダイヤルプランに追加することができます。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以前の場合

**ステップ 1** 選択 [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤル プランの設定 (Dial Plan Configuration)]。 [追加 (Add)] をクリックします。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

選択 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤル プランの設定 (Dial Plan Configuration)]。 [Add] をクリックします。

[ダイヤルパターンの追加 (Add Dial Pattern)] ダイアログボックスが表示されます。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

[アラームとレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤルプランの設定 (Dial Plan Configuration)] の順に選択します。

名前を入力して、[ダイヤルプラン名 (Dial Plan Name)] フィールドに新しいダイヤル プランを追加します。

表の最後で + (追加) をクリックして、ダイヤル パターンを追加します。

新しい行が作成されます。

**ステップ 2** 次の各フィールドにデータを入力して、ダイヤル パターンを作成します。

- [条件 (Condition)] : 文字の数に適用されます。次のいずれかを選択します。
  - 左向き矢印 (& lt;) : 未満
  - 右向き矢印 (& gt;) : より大きい
  - 等号 (=) : 等しい
- [文字数 (Number of Chars)] : プラス (+)、シャープ (#)、アスタリスク (\*)、コンマ (,)、アットマーク (@) を含む、数字と数字以外の文字の合計数を入力します。ダイヤル パターンが適用される電話番号の文字数を表します。
- [パターン (Pattern)] : パターンを入力して、数字に適用します。次のようになります。
  - G は数字がゲートウェイ コードを表していることを示します。
  - T は、Cisco Prime Collaboration Assurance がダイヤル プランで設定されたフリーダイヤル番号と比較されることを示します。
  - ! は、複数の数字 (1234 または 5551234 のように、長さが 1桁より大きい任意の数字) を示します。
  - X は 1桁の数値 (0、1、または 9 など) を示します。
- **Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP2 以降の場合**

[コールカテゴリ名 (Call Category Name)] : 次のラジオボタンのいずれかを選択し、必要に応じてデータを指定します。

- [既存 (Existing) ] : 既存のコール カテゴリ名を選択します。
- [新規 (New) ] : 一意の名前を入力し、コールのカテゴリ タイプを選択します。

• **Cisco Prime Collaboration** リリース 12.1 SP3 以降の場合

[コールカテゴリ名 (Call Category Name) ] : [コール カテゴリの設定 (Set Call Category) ] 「」 ユーザ インターフェイスを使用して設定されたドロップダウンリストから、既存のコールカテゴリ名を選択します。

ステップ 3 [OK] をクリックします。

**Cisco Prime Collaboration** リリース 12.1 SP3 以降の場合

[保存 (Save) ] をクリックします。

行がテーブルに追加されます。

**VG/トランクへの発信、内戦コール、OnNet トランク コールにダイヤルパターンを割り当てる**

次の表に、ユーザ定義のダイヤルプランから、Internal、VG/Trunk-Outgoing、OnNet Trunk のコール カテゴリにダイヤルパターンを割り当てる方法を示します。

Cisco Prime Collaboration によって、このカテゴリ タイプのダイヤルパターンが割り当てられます。	適用先の電話番号の種類	対象となるコールのシステム定義カテゴリ
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 会議</li> <li>• 緊急</li> <li>• 国際</li> <li>• ローカル</li> <li>• 長距離</li> <li>• サービス</li> <li>• トールフリー</li> <li>• [ボイスメール (Voicemail) ]</li> </ul>	接続先	VG/Trunk-Outgoing
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 会議</li> <li>• ボイスメール</li> </ul>	送信元	

Cisco Prime Collaboration によって、このカテゴリ タイプのダイヤルパターンが割り当てられます。	適用先の電話番号の種類	対象となるコールのシステム定義カテゴリ
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 会議</li> <li>• ボイスメール</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 送信元</li> <li>• 送信先</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 内部</li> <li>• OnNet Trunk</li> </ul>

## ダイヤルプランの編集

ダイヤルプランを編集できます。ダイヤルプランの編集集中に、ダイヤルパターンの追加、編集、または削除を行うことができます。

- 
- ステップ 1** [アラームとレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ダイヤルプランの設定 (Dial Plan Configuration)] の順に選択します。
- ステップ 2** [編集 (Edit)] アイコンをクリックして、ダイヤルパターンを変更します。
- ステップ 3** 必要な変更を加えます。
- ステップ 4** 既存のダイヤルパターンを変更するには、「「ダイヤルプランの追加」」の**ステップ 3**を行います。
- ステップ 5** [保存 (Save)] アイコンをクリックします。テーブルの行が更新されます。
- 

## ダイヤルプランの削除

ダイヤルプランを削除することができます。

- 
- ステップ 1** 該当する行を選択して [削除 (Delete)] ボタンをクリックすると、ダイヤルプランが削除されます。
- ステップ 2** [保存 (Save)] をクリックして、すべての変更をダッシュレットに保存します。
- [キャンセル (Cancel)] をクリックして終了します。
- 

## ゲートウェイコードの設定

Cisco Prime Collaboration Assurance は、設定されているゲートウェイコードを使用して、外部コールのコール分類を決定します。



- (注) ゲートウェイコードがすでに設定されているゲートウェイを表示するには、クラスタを選択して [表示 (View)] をクリックします。ゲートウェイコードレポートには、メディアゲートウェイ制御プロトコル (MGCP)、および H323 ゲートウェイのみが表示されます。アナログのシグナリング接続制御部 (SCCP) ゲートウェイは表示されません。
-

ゲートウェイ コードを設定するには、次のようにします。

**ステップ 1** 移行方法 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ゲートウェイコードの設定 (Gateway Code Configuration)]。

**Cisco Prime Collaboration** リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR 分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [ゲートウェイコードの設定 (Gateway Code Configuration)]。

**ステップ 2** [ゲートウェイコード概要 (Gateway Code Summary)] ページでクラスタを選択し、[ゲートウェイコードの管理 (Manage Gateway Code)] をクリックします。

**ステップ 3** ゲートウェイコードを入力し、[適用 (Apply)] をクリックします。

## SFTP 設定項目の設定

Unified Communications Manager を使用してコールを監視する場合は、SFTP を設定する必要があります。

SFTP を設定するには、次の手順を実行します。

**ステップ 1** 移行方法 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [CDR ソース設定 (CDR Source Settings)] > [CUCM SFTP クレデンシャル (CUCM SFTP Credentials)]。

**Cisco Prime Collaboration** リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR ソース設定 (CDR Source Settings)] > [CUCM SFTP クレデンシャル (CUCM SFTP Credentials)]。

**Cisco Prime Collaboration** リリース 12.1 以降の場合

移行方法 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)] > [CUCM/SFTP クレデンシャル (CUCM/SFTP Credentials)]。

**Cisco Prime Collaboration** リリース 12.1 SP3 以降の場合

移行方法 [インベントリ (Inventory)] > [インベントリ管理 (Inventory Management)]。[CUCM SFTP クレデンシャル (CUCM SFTP Credentials)] タブをクリックします。

**ステップ 2** 必要な情報を入力します。フィールドの説明については、「[\[SFTP Settings\] ページ - フィールドの説明](#)」を参照してください。

**ステップ 3** [保存 (Save)] をクリックします。

管理対象のすべての Unified Communications Manager のパブリッシャ全体で SFTP クレデンシャルを更新するかどうかを確認するポップアップメッセージ ウィンドウが表示されます。

(注) Cisco Prime Collaboration Assurance が、管理対象の Unified Communications Manager のパブリッシャーで課金サーバとして追加されます。

ステップ 4 [はい (Yes)] をクリックします。

## [SFTP Settings] ページ - フィールドの説明

Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合

次の表では、SFTP 設定ページのフィールドについて説明します。

表 1: [SFTP Settings] ページ - フィールドの説明

フィールド	説明
[Username]	ユーザ名は smuser から変更できません。 これと同じ username と smuser を Cisco Unified Communications Manager に設定する必要があります。

フィールド	説明
パスワード	<p>新規インストール中は、CUCMSFTP クレデンシャルがデフォルトで設定されていないことを確認してください。[インベントリ管理 (Inventory Management)] -&gt; [CUCM SFTP クレデンシャル (CUCM SFTP Credentials)] タブで、CUCMSFTP パスワードを設定する必要があります。</p> <p>クレデンシャルが設定されていない場合、ユーザはデバイス検出中に PCA を CDR 接続先として CUCM に追加することができません。アプリケーションは、CUCMSFTP パスワードを設定するようユーザに警告するために、 「Please configure CUCM SFTP credentials to enable this feature. It can be configured under CUCM SFTP Credentials Tab」と表示します。</p> <p>(注) PCA を CDR 接続先として CUCM に追加する必要がある場合は、デバイスの検出を開始するときに、[デバイスの検出 (Discover Devices)] -&gt; [デバイス検出 (Device Discovery)] タブの [自動設定 (Auto-Configuration)] オプションで、[Unified CMサーバでPrime CollaborationサーバをCDR接続先として追加する (Add the Prime Collaboration server as a CDR Destination in the Unified CM servers)] チェックボックスをオンにしてください。詳細については、「検出方法」のセクションを参照してください</p> <p><b>Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合</b></p> <p>デフォルトのパスワードは smuser です。ここでパスワードを変更する場合は、smuser のパスワードも Cisco Unified Communications Manager で変更する必要があります。</p>
パスワードの再入力	確認のためにパスワードを入力します。

**Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合**

次の表では、SFTP 設定ページのフィールドについて説明します。

表 2: [SFTP Settings] ページ - フィールドの説明

フィールド	説明
Low-Volume Schedule Hours	
<day> <timerange>	timerange は、各曜日について、Cisco Prime Collaboration Assurance プロセスが処理するレコードが少なくなってきた時間を示します。少量スケジュールの期間中、Cisco Prime Collaboration Assurance はデータベースのメンテナンスを実行します。
その他	
Wait for Diagnostic Report (min)	データが大量である場合、Cisco Prime Collaboration Assurance による検索時にここで指定した分単位の時間が経過すると、その時点までに検出された一致レコードが診断レポート用に表示されます。
Report Data Retention Period (days)	データをパージする前に、Cisco Prime Collaboration Assurance のデータベースに保持される日数。
SFTP	
[ユーザ名 (Username) ]	ユーザ名は smuser から変更できません。 これと同じ username と smuser を Cisco Unified Communications Manager に設定する必要があります。



フィールド	説明
[Change password] チェックボックス	<p><b>Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合</b></p> <p>新規インストール中は、CUCMSFTP クレデンシヤルがデフォルトで設定されていないことを確認してください。[インベントリ管理 (Inventory Management)] -&gt; [CUCM SFTP クレデンシヤル (CUCM SFTP Credentials)] タブで、CUCM SFTP パスワードを設定する必要があります。</p> <p>クレデンシヤルが設定されていない場合、ユーザはデバイス検出中に PCA を CDR 接続先として CUCM に追加することができません。アプリケーションは、CUCMSFTP パスワードを設定するようユーザに警告するために、「Please configure CUCM SFTP credentials to enable this feature. It can be configured under CUCM SFTP Credentials Tab」と表示します。</p> <p>(注) PCA を CDR 接続先として CUCM に追加する必要がある場合は、デバイスの検出を開始するときに、[デバイスの検出 (Discover Devices)] -&gt; [デバイス検出 (Device Discovery)] タブの [自動設定 (Auto-Configuration)] オプションで、[Unified CMサーバでPrime CollaborationサーバをCDR接続先として追加する (Add the Prime Collaboration server as a CDR Destination in the Unified CM servers)] チェックボックスをオンにしてください。詳細については、「検出方法」のセクションを参照してください</p> <p><b>Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合</b></p> <p>デフォルトのパスワードは smuser です。ここでパスワードを変更する場合は、smuser のパスワードも Cisco Unified Communications Manager で変更する必要があります。</p>

# 管理レポート

利用可能な管理レポートは次のとおりです。

レポート	説明
System Status レポート	<p>インベントリ、データ消去、通知、電話ライセンス（模擬テスト、電話ステータステスト、IP SLA 音声テストで構成）、およびシステム制限に関する情報を表示します。</p> <p>模擬テスト、電話ステータステスト、および IP SLA 音声テストでは、次のテスト結果についてのみ情報が提供されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 模擬テスト：Cisco Prime Collaboration Assurance サーバの CPU 使用率が高いためテストの実行に失敗した場合。</li> <li>• 電話ステータス：SAA ソースデバイスに到達できない場合。</li> <li>• IP SLA 音声テスト：             <ul style="list-style-type: none"> <li>• 設定が正しくない場合。</li> <li>• デバイスのメモリが不足している場合。</li> <li>• ソース デバイスが応答していない場合。</li> <li>• デバイスがリブートした場合。</li> </ul> </li> </ul> <p>電話ステータステストでは、次の結果について情報が提供されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 電話ステータステスト：SAA ソースデバイスに到達できない場合。</li> </ul> <p>システム制限のパラメータについては、次の説明が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート：イーサネット ポートはこのパラメータに分類されます。</li> <li>• インターフェイス：音声インターフェイスはこのパラメータに分類されます。</li> </ul>

レポート	説明
ログオンしているユーザ レポート	Cisco Prime Collaboration Assurance に現在ログインしているユーザを特定するために役立ちます。
プロセス ステータス	Cisco Prime Collaboration Assurance で現在実行されているプロセスのステータスを表示します。

## CDR および CMR のコールレポート

Cisco Prime Collaboration Assurance で処理できるのは、過去 24 時間の CDR および CMR データだけです。CDR レポートは、コール カテゴリ タイプ、コール クラス、コール時間、コールリリース コードなどのコールの詳細を表示します。CMR レポートは [音声コール品質拠点上位5ヶ所 (Top 5 Voice Call Quality Location)] からクロス起動でき、CDR レポートは [コール失敗発生拠点上位5ヶ所 (Top 5 Call Failure Location)] からクロス起動できます。また、CMR レポートは ServiceQualityThresholdCrossed アラームからもクロス起動できます。レポートには、最初に最大 40 件のレコードがロードされ、下へスクロールするとさらに多くのレコードを表示できます。

生成されたレポートから任意のグレードを選択すると、その特定の CDR レコードについて、CMR レポートの詳細をインライン CMR (ポップオーバー) で確認できます。



(注) CDR レポートは、Cisco Prime Collaboration Assurance と CUCM の両方が同じドメイン内にある場合にのみ機能します。

CMR レポートでは、クラスタのすべてのコールデータを含むレポート、またはコールデータのサブセットを含むレポートが生成されます。

次の表では、CDR コールレポートのフィールドについて説明します。

フィールド	説明
-------	----

Grade	<p>音声コールのグレード設定に基づきます。次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [良好 (Good) ] : コール値がロング コールの SCSR (%) またはショートコールの SCSR (%) のしきい値を下回っています。このグレードの値は緑色で表示されます。</li> <li>• [可 (Acceptable) ] : コール値がロング コール SCSR (%) またはショートコールの SCSR (%) のしきい値以上です。このグレードの値はオレンジ色で表示されます。</li> <li>• [不良 (Poor) ] : コール値がロング コールの SCSR (%) またはショートコールの (%) のしきい値を上回っています。このグレードの値は赤色で表示されます。</li> <li>• [該当なし (N/A) ] : SCSR (%) が利用不可能または負の値です。</li> <li>• [すべて (All) ] : すべてのグレードを選択します。</li> </ul>
クラスタ ID	Unified Communications Manager クラスタです。

発信者/着信者	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>ディレクトリ番号</b>：コールが行われたディレクトリ番号です。</li><li>• <b>デバイス タイプ</b>：コールを発信したデバイスのタイプです。</li><li>• <b>シグナリング IP</b>：コールシグナリングを発信したデバイスの IP アドレスです。IP Phone の場合、このフィールドでは電話機のアドレスが指定されます。PSTN コールの場合、このフィールドでは H.323 ゲートウェイのアドレスが指定されます。</li><li>• <b>B チャンネル</b>：MGCP ゲートウェイの B チャンネル番号で、適用されない場合は NA となります。</li><li>• <b>メディア IP</b>：コールの発信元の IP アドレスです。</li><li>• <b>コーデック</b>：コーデック名です。</li><li>• <b>メディア ポート</b>：コールの発信元のポートです。</li><li>• <b>デバイス プール</b>：コールの発信元のデバイスプールです。</li><li>• <b>デバイスの場所</b>：コールの発信場所です。 [表示 (Show) ] ドロップダウンメニューから [クイックフィルタ (Quick Filter) ] を選択すると、Caller/Called のデバイスの場所の検索オプションを指定できます。</li><li>• <b>[デバイス名 (Device Name) ]</b>：デバイスの名前です。</li><li>• <b>終了原因</b>：コールが終了した理由を表す文字列です。</li></ul>
---------	---

Caller Video/Called Video	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ビデオコーデック</b> : ビデオコーデック名です。</li> <li>• <b>ビデオ帯域幅</b> : ビデオの帯域幅です。</li> <li>• <b>ビデオ IP</b> : ビデオの発信元の IP アドレスです。</li> <li>• <b>ビデオ ポート</b> : ビデオの発信元のポートです。</li> <li>• <b>ビデオ解像度</b> : ビデオの解像度です。</li> </ul>
Call Class	<p>次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Offnet</li> <li>• Onnet</li> </ul> <p>(注) 詳細については、<a href="#">OffNet および OnNetNet コールを理解する (12 ページ)</a> を参照してください。</p>
期間	<p>コールが開始された日付と時刻を、Cisco Prime Collaboration Assurance サーバのローカルタイムゾーン (Cisco Unified CM が配置されているタイムゾーンではなく) で表します。最大時間の制限は 7 日間です。。</p>
Call Duration(s)	<p>コールの長さ (秒単位)。</p>
Call Category Names	<p>コールが属するカテゴリのカンマ区切りのリスト。詳細については、<a href="#">コール分類 (9 ページ)</a> および<a href="#">コール カテゴリの作成 (12 ページ)</a> を参照してください。</p>
Call Category Types	<p>コールカテゴリが属するカテゴリタイプのカンマ区切りのリスト。詳細については、次の項を参照してください：<a href="#">コール分類 (9 ページ)</a> および<a href="#">コール カテゴリの作成 (12 ページ)</a></p>

次の表では、CMR レポートのフィールドについて説明します。

フィールド	説明
MOS	<p>サンプル期間中の平均 MOS 値。サンプル期間が非常に短い場合、この値は N/A と表示されるか、または表示されません。</p> <p>MOS はリスナー側の音質を反映します。</p>

Minimum MOS	サンプル期間中の最小 MOS スコア。 サンプル期間が非常に短い場合、この値はN/Aと表示されるか、または表示されません。
Grade	音声コールのグレード設定に基づきます。次のいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• [良好 (Good) ] : コール値がロング コールの SCSR (%) またはショート コールの SCSR (%) のしきい値を下回っています。このグレードの値は緑色で表示されます。</li><li>• [可 (Acceptable) ] : コール値がロング コール SCSR (%) またはショート コールの SCSR (%) のしきい値以上です。このグレードの値はオレンジ色で表示されます。</li><li>• [不良 (Poor) ] : コール値がロング コールの SCSR (%) またはショート コールの (%) のしきい値を上回っています。このグレードの値は赤色で表示されます。</li><li>• [該当なし (N/A) ] : SCSR (%) が利用不可能または負の値です。</li><li>• [すべて (All) ] : すべてのグレードを選択します。</li></ul>

発信者/着信者	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ディレクトリ番号</b>：コールが行われたディレクトリ番号です。</li> <li>• <b>デバイス タイプ</b>：コールを発信したデバイスのタイプです。</li> <li>• <b>シグナリング IP</b>：コールシグナリングを発信したデバイスの IP アドレスです。IP Phone の場合、このフィールドでは電話機のアドレスが指定されます。PSTN コールの場合、このフィールドでは H.323 ゲートウェイのアドレスが指定されます。</li> <li>• <b>Bチャネル</b>：MGCPゲートウェイのBチャネル番号で、適用されない場合は NA となります。</li> <li>• <b>メディア IP</b>：コールの発信元の IP アドレスです。</li> <li>• <b>コーデック</b>：コーデック名です。</li> <li>• <b>メディア ポート</b>：コールの発信元のポートです。</li> <li>• <b>デバイス プール</b>：コールの発信元のデバイス プールです。</li> <li>• <b>デバイスの場所</b>：コールの発信場所です。 [表示 (Show) ] ドロップダウンメニューから [クイックフィルタ (Quick Filter) ] を選択すると、Caller/Called のデバイスの場所の検索オプションを指定できます。</li> <li>• [デバイス名 (Device Name) ]：デバイスの名前です。</li> </ul>
リスナー DN/IP	<p>MOSと障害の詳細が報告されたエンドポイント（着信側または発信側）を識別します。次のいずれかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• リスナーの IP アドレスです。</li> <li>• リスナーの電話番号です。</li> </ul>
Jitter (ms)	サンプル期間中のジッタ値（ミリ秒単位）。



Packet Loss	サンプル期間中にネットワーク伝送が原因で失われたパケットの数です。観察された RTP シーケンス番号の分析に基づいて計算されます。
Max Jitter (ms)	サンプル期間中の最大ジッタ値（ミリ秒単位）です。
フレーム損失発生秒数（Conceal Seconds）	音声ストリームの開始以降、隠蔽イベント（フレーム損失）があった秒数（深刻な隠蔽の秒数を含む）です。
深刻なフレーム損失発生秒数（Severely Conceal Seconds）	大量の（50 ミリ秒を超える）隠蔽が確認された秒数。
隠蔽フレーム	合計フレームに対する隠蔽フレームの比率です。
遅延	遅延
クラスタ	Unified Communications Manager クラスタです。
期間	コールが開始された日付と時刻を、Cisco Prime Collaboration Assurance サーバのローカルタイムゾーン（Unified Communications Manager が配置されているタイムゾーンではなく）で表します。
Call Duration(s)	コールの長さ（秒単位）。
Caller Termination Cause	発信側エンドポイントでコールが終了した理由を表す文字列。
Called Termination Cause	着信側エンドポイントでコールが終了した理由を表す文字列。失敗したコールの原因コードについては、『Cisco Unified Communications Manager コール詳細レコードアドミニストレーションガイド』の「コール終了原因コード」の項を参照してください。

ビデオ属性	<p>エンドポイント レポートには、次のようなビデオ属性が含まれています (ビデオ エンドポイントの場合)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ビデオの長さ</li> <li>• ビデオのパケット損失</li> <li>• ビデオ ジッター</li> <li>• ビデオのラウンドトリップ時間</li> <li>• ビデオの RX 解像度</li> <li>• ビデオの RX フレーム損失</li> </ul>
Severely Conceal Seconds Ratio (%)	音声品質を測定するメトリック。コールの合計時間に対する深刻な隠蔽の秒数 (SCS) の比率を表します。
Conceal Seconds Ratio (%)	ネットワーク品質を測定するメトリック。コールの合計時間に対する隠蔽秒数 (CS) の比率を表します。



- (注)
- デフォルトでは、CDR および CMR レポートの一部の列は非表示になっています。他のフィールドを表示するには、[設定 (settings)] ボタンをクリックし、[列 (columns)] を選択します。
  - CDR および CMR レポートは Jabber をサポートしています。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

デバイスの場所をシステムの場所のいずれか (Hub\_None、Phantom、または Shadow) に設定した場合、[場所 (Location)] フィールドには、デバイスで設定されている場所ではなく、デバイス プールで設定されている場所が表示されます。



- (注)
- Cisco Prime Collaboration Assurance は、Unified Communications Manager にユーザが定義した場所 Hub\_None 表示して、次の機能 とレポートを提供します。
    - CDR および CMR レポート
    - 上位 5 位の低音声通話品質ロケーション
    - 上位 5 つの通話失敗の場所
    - 未登録の電話機のトラブルシューティング：上位 5 ヶ所
    - 場所ごとのグローバル検索
  - デバイスの場所が Hub\_None に設定されていて、Unified Communications Manager のユーザ定義のどのデバイス プールにも関連付けられていない場合は、Cisco Prime Collaboration Assurance で [デバイスの場所 (Device Location)] が Hub\_None として表示されます。また、Cisco Prime Collaboration Assurance では、場所ごとのグローバル検索および Unified Communications Manager のトラブルシューティング ビューで、Hub\_None が有効な場所として表示されます。

クイックフィルタ オプションを使用すると、レポートのフィールドをフィルタ処理できます。詳細については、「[フィルタ](#)」の「クイック フィルタ」の項を参照してください。

CDR および CMR レポートは、CSV と PDF のどちらの形式でもエクスポートできます。PDF ファイルにエクスポートできるレコードの最大数は 30,000 です。CSV ファイルにエクスポートできるレコードの最大数は 200,000 です。

レポートをエクスポートするには、レポート ウィンドウの右側のペインにある [エクスポート (Export)] ツール ボタンをクリックします。ファイルをエクスポートしようとしたときにクライアントシステムが応答しない場合は、「[ファイルのダウンロードに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

CDR および CMR レポートでサポートされているビデオ コーデックは次のとおりです。

- AAC
- G711Alaw 56k
- G711Alaw 64k
- G711Ulaw 56k
- G711Ulaw 64k
- G722 48k
- G722 56k
- G722 64k
- G722.1 24k
- G722.1 32k

- G723.1
- G726 16K
- G726 24K
- G726 32K
- G728
- G729
- G729AnnexA
- G729AnnexAwAnnexB
- G729AnnexB
- GSM
- GSM Enhanced Full Rate
- GSM Full Rate
- GSM Half Rate
- iSAC
- H.264
- H.265

## CDR & CMR レポートの生成

CDR および CMR のコール レポートを生成する手順を次に説明します。



(注) 管理者のみがCDR/CMRレポートをエクスポートできます。サーバにエクスポートするタスクを自動化するには、スクリプトを作成する必要があります。

**ステップ 1** 選択 [アシュアランス レポート (Assurance Reports) ] > [CDR および CMR レポート (CDR & CMR Reports) ]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

移行方法 [レポート (Reports) ] > [CDR および CMR レポート (CDR & CMR Reports) ]。

[CDR&CMRレポート (CMR Reports) ] ページが表示されます。

**ステップ 2** 以下に示すフィールドに情報を入力します。

表 3:

フィールド	説明
ディスプレイ	[表示 (Display) ] から [CDR/CMR] を選択します
クラスタ	[クラスタ (Cluster) ] から [クラスタ (Clusters) ] を選択します。デフォルト値は「すべて (All) 」です。
場所/デバイス プール	[Location/DevicePool] から [場所 (Location) ] または [デバイス プール (Devicepool) ] を選択します。デフォルト値は「場所 (ロケーション) 」です。 [Location/DevicePool] から [場所 (Location) ] を選択した場合は、[場所 (Location) ] から任意の場所を選択します。[Location/DevicePool] から [デバイス プール (Devicepool) ] を選択する場合は、[デバイス プール (Devicepool) ] から任意のデバイス プールを選択します。[場所 (Location) ] または [デバイス プール (Devicepool) ] で利用可能な検索オプションから Location/Devicepool を検索することもできます。[場所 (Location) ] または [デバイス プール (Devicepool) ] のデフォルト値は任意です。
デバイス タイプ	[デバイス タイプ (Device Type) ] から デバイスを選択します。デフォルト値は「すべて (Any) 」です。
エンドポイント	[エンドポイント (Endpoint) ] から、[ディレクトリ番号 (Directory Number) ] または [IP アドレス (IP Address) ] を選択します。デフォルト値は「ディレクトリ番号 (Directory Number) 」です。
発信者	ディレクトリ番号または発信者の IP アドレスを入力します。ディレクトリ番号のデフォルト値は「*」で、IP アドレスのデフォルト値は「*.*.*」です。 ディレクトリ番号には、英数字と特殊文字 (+、*、@、_、- など) の任意の組み合わせを含めることができます。 ディレクトリ番号検索の際、1 桁のワイルドカードには大文字の「X」を使用します。複数桁のワイルドカードには「*」を使用してください。例としては「1100X」や「11*」などです。 IP アドレス検索の場合、「*」ワイルドカードはオクテット全体に適用されます。たとえば、「172.30.*.*」や「2005:0420:2e00:0094:*.*.*」となります。

フィールド	説明
コール済み	ディレクトリ番号または発信者のIPアドレスを入力します。ディレクトリ番号のデフォルト値は「*」で、IPアドレスのデフォルト値は「*.*.*」です。 ディレクトリ番号には、英数字と特殊文字（+、*、@、_、-など）の任意の組み合わせを含めることができます。 ディレクトリ番号検索の際、1桁のワイルドカードには大文字の「X」を使用します。複数桁のワイルドカードには「*」を使用してください。例としては「1100X」や「11*」などです。 IPアドレス検索の場合、「*」ワイルドカードはオクテット全体に適用されます。たとえば、「172.30.*.*」や「2005:0420:2e00:0094:*.*.*」となります。
Call Category	[コールカテゴリ (Call Category)] から、名前またはタイプを選択します。デフォルト値は「名前 (Name)」です。
カテゴリの名前とタイプ	カテゴリ名またはカテゴリタイプを選択します。デフォルト値は「すべて (All)」です。
Grade	[良好 (Good)]、[許容 (Acceptable)]、[低品質 (Poor)]、[すべて (All)] または [該当なし (N/A)] を選択します。デフォルト値は「すべて (All)」です。
Jitter	[ジッター (Jitter)] から範囲を選択して、値をミリ秒単位で入力します。デフォルトの範囲は 0 以上です。
Packet Loss	[パケット損失] から範囲を選択して、このフィールドに値を入力します。デフォルトの範囲は 0 以上です。
フレーム損失発生秒数 (Conceal Seconds)	範囲を選択し、[秒 (seconds)] フィールドに値を入力します。デフォルトの範囲は 0 以上です。
Conceal Ratio	[フレーム損失率 (Conceal Ratio)] から範囲を選択して、このフィールドに値を入力します。デフォルトの範囲は 0 以上です。

フィールド	説明
Call Type	[音声 (Audio) ]、[ビデオ (Video) ]、または [任意 (Any) ] を選択します。デフォルト値は「すべて (Any) 」です。
Call Class	[オンネット (On Net) ]、[オフネット (Off-Net) ]、または [任意 (Any) ] を選択します。デフォルト値は「すべて (Any) 」です。
Call Duration	[通話時間 (Call Duration) ] から通話時間の値を選択し、[秒 (secs) ] フィールドに時間を入力します。デフォルト値は「すべて (Any) 」です。
Termination Type	[成功 (Success) ]、[失敗 (Failed) ]、または [任意 (Any) ] のいずれかを選択します。デフォルト値は「すべて (Any) 」です。
Termination Cause Code	[コール終了原因コード (Termination Cause Code) ] から原因コードを選択します。デフォルト値は「すべて (All) 」です。

フィールド	説明
Time Period	<p>[コール接続時刻 (Call Connect Time)] または [コール切断時刻 (Call Disconnect Time)]。デフォルト値は [コール接続時刻 (Call Connect Time)] です。トップNのダッシュレットを使用した相互起動の場合、デフォルト値は [コール切断時刻 (Call Disconnect Time)] です。</p> <p>[コール接続時刻 (Call Connect Time)] : コールが発信された時間。</p> <p>[コール切断時刻 (Call Disconnect Time)] : 通話が終了するまでの時間。</p> <p>[過去 (Past)] を選択するか、開始時刻と終了時刻を入力します。デフォルト値は [過去 (Past)] です。開始時刻のデフォルト値は、現在の時刻の1時間前、終了時刻は現在の時間です。</p> <p>[過去 (Past)] は、分、時間、または日単位で選択できます。[過去 (Past)] のデフォルト値は1時間です。</p> <p>たとえば、今日の午後10時に過去8時間を選択した場合、午後2時から9時59分までのレコードが表示されます。</p> <p>今日10時に過去1日を選択した場合は、前日の午前12時から午後11時59分までのレコードが表示されます。</p>

[ジッター (Jitter)]、[パケット損失 (Packet Loss)]、[フレーム損失発生秒数 (Conceal Seconds)]、[フレーム損失率 (Conceal Ratio)] フィールドはCMRフィルタのみに適用され、[コールカテゴリ (Call Category)]、[コールタイプ (Call Type)]、[コールクラス (Call Class)]、[通話時間 (Call Duration)]、[終了タイプ (Termination Type)]、および[終了原因コード (Termination Cause Code)] フィールドはCDRフィルタのみに適用されます。

**ステップ 3** [フィルタを適用 (Apply Filter)] をクリックします。

CDR & CMR レポートが生成されます。

選択したフィルタでレコードが使用不可の場合は、利用可能なデータは表示されません。

CDR & CMR レポートには、過去7日間のレコードのみが表示されます。



## トラブルシューティング

- 1. 問題：**CDR & CMR レポートに、「N/A」としてグレードが表示される。

**推奨処置：**Severely Conceal Seconds Ratio 値をエンドポイントから受信していないかどうか、または CMR が存在しないかどうかを確認します。
- 2. 問題：**Severely Conceal Seconds Ratio が x% であり、コールのグレードは Poor Call だが、実際にはコールの品質は低くない。

**推奨処置：**[CDR分析の設定 (CDR Analysis Settings)] の [音声通話グレード (Voice Call Grade)] ページで、Severely Conceal Seconds Ratio のしきい値を設定できます。
- 3. 問題：**コールのグレードが正しくない。

**推奨処置：**Severely Conceal Seconds Ratio のしきい値を、コールの CMR レポートの Severely Conceal Seconds Ratio 値に対してクロスチェックします。
- 4. 問題：**CDR/CMR レコードが受信されない。

**推奨処置：**次のいずれかを実行します。

  - PCA を課金サーバとして Unified CM に (追加されていない場合は) 追加します。  
PCA を課金サーバとして追加する場合は、CDR の送信がエラーになるのを防ぐために、Unified CM で [障害時に再送 (Resend on Failure)] オプションをオンにしてください。
  - Cisco Prime Collaboration Assurance と Unified CM の課金サーバで、SFTP のユーザ名およびパスワードが同じであるかどうかを確認します。
  - Unified CM で CDR Repository Manager または CDR エージェント サービスが稼働しているかどうかを確認します。
  - Unified CM で [CDR有効フラグ (CDR Enabled Flag)] と [コール診断有効 (Call Diagnostics Enabled)] のオプションが正しく設定されているかどうかを確認します。
  - ファイアウォールの設定によってファイル転送がブロックされていないかを確認し、ブロックされている場合は、ネットワーク インフラストラクチャ レベルで修正します。
  - クラスタのデータ収集が [通話品質データソース管理 (Call Quality Data Source Management)] ページで [失敗 (Failed)] 状態である場合は、そのパブリッシャに対して再検出を実行します。Cisco Prime Collaboration Assurance のデバイスのセットアップ、およびデバイス設定のリストに関しては、次のリンク先を参照してください。
    - [Cisco Prime Collaboration Assurance のデバイス設定](#)
    - [Cisco Prime Collaboration Assurance のデバイス設定](#)

# NAM & Sensor Report

NAM & Sensor レポートには、データ、MOS、ジッタ、タイムスタンプを収集したセンサの名前が表示されます。



(注) このレポートは、Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードでインストールした場合には適用されません。

NAM & Sensor レポートを生成するには、[アシュアランス レポート (Assurance Reports)] > [NAM および センサー レポート (NAM & Sensor Reports)]。必須フィールドに値を入力し、[レポートの生成 (Report Report)] をクリックします。

## Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

選択 [レポート (Report)] > [NAM およびセンサー レポート (NAM & Sensor Reports)]。

次の表は、NAM & Sensor レポートのフィールドについての説明です。

フィールド	説明
Name	データを収集し、MOSを分析したセンサの内容を示す名前です。  (注) Cisco 1040 と <MAC アドレスの下 6 桁の番号> は、Cisco Prime Collaboration Assurance に自動的に登録された Cisco 1040 を識別します。
ID	1040 MAC アドレス、あるいは Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM)、または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) の IP アドレスです。

スピーカー/リスナー	<p>ディレクトリ番号：次のようにデバイスが Unified Communications Manager によって管理されている場合に表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>適切なクレデンシャルで vCisco Prime Collaboration Assurance に追加されます。</li> <li>監視は中断されていません。</li> </ul> <p>デバイス タイプ：デバイス タイプまたは次のいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>N/A：何らかのエラーにより、Cisco Prime Collaboration Assurance はデバイス タイプを取得できません。</li> <li>利用不可：Cisco Prime Collaboration Assurance はこの電話を初めて認識し、デバイス タイプがまだ認識されていないか、対応する Unified CM が以下のとおりとなっています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Cisco Prime Collaboration Assurance に追加されていません。</li> <li>Cisco Prime Collaboration Assurance に有効なデバイス タイプが提供されていません。</li> </ul> </li> </ul> <p>IP アドレス：IP アドレスがクリックできる場合は、これをクリックして [詳細なデバイスビュー (Detailed Device View)] ページまたは [電話の詳細 (Phone Detail)] ウィンドウを起動します。</p> <p>UDP ポート：メディアストリームのソースであるトランスポート レイヤ ポートです。</p> <p>Device Name。</p>
時刻	センサーが MOS を計算した時刻。
TOS	サービスのタイプ (TOS) 。

MOS	<p>サンプル期間中の平均MOS値。サンプル期間が非常に短い場合、この値はN/Aと表示されるか、または表示されません。</p> <p>MOSはリスナー側の音質を反映します。値をクリックすると、[Sensor Stream Correlation]ウィンドウが表示されます。</p>
Minimum MOS	<p>サンプル期間中の最小MOSスコア。</p> <p>サンプル期間が非常に短い場合、この値はN/Aと表示されるか、または表示されません。</p>
Primary Degradation Cause	<p>次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ジッタ</li> <li>• パケット損失</li> <li>• [None] : ジッタとパケット損失の両方の値が0（ゼロ）。</li> </ul> <p>サンプル期間が非常に短い場合、この値はN/Aと表示されるか、または表示されません。</p>
Grade	<p>音声コールのグレード設定に基づきます。次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [良好 (Good)] : コール値がロングコールのSCSR (%) またはショートコールのSCSR (%) のしきい値を下回っていません。</li> <li>• [可 (Acceptable)] : コール値がロングコールSCSR (%) またはショートコールのSCSR (%) のしきい値以上です。</li> <li>• [不良 (Poor)] : コール値がロングコールのSCSR (%) またはショートコールのSCSR (%) のしきい値を上回っていません。</li> <li>• [該当なし (N/A)] : SCSR (%) 値が使用できないか、マイナス値です。</li> <li>• [すべて (All)] : すべてのグレードを選択します。</li> </ul> <p>詳細については、<a href="#">音声通話グレード設定の概要</a>を参照してください。</p>

Jitter (ms)	サンプル期間中のジッタ値（ミリ秒単位）。
Packet Loss	サンプル期間中にネットワーク伝送が原因で失われたパケットの数です。観察された RTP シーケンス番号の分析に基づいて計算されます。
Sample Duration(s)	分析対象の最初のパケットから最後のパケットまでの秒数です。この値は通常 60 ですが、最初のストリームまたは最後のストリームの場合は、より小さい値になる可能性があります。
Max Jitter (ms)	サンプル期間中の最大ジッタ値（ミリ秒単位）です。
Adjusted Packet Loss(%)	高ジッタが原因で損失したパケットのパーセンテージ。固定長遅延の参照ジッタ バッファに基づいて計算されます。この値はネットワーク損失の影響は受けません。
パケット損失 (%)	パケット損失のパーセントです。（パケット損失を予測される合計パケットで割り、パーセントで表現）。
SSRC	同期ソース ID - RTP パケット ストリームの発信元を識別します。
リスナー DN/IP	MOS と障害の詳細が報告されたエンドポイント（着信側または発信側）を識別します。次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• リスナーの IP アドレスです。</li> <li>• リスナーの電話番号です。</li> </ul>
クラスタ	Unified Communications Manager クラスタです。

発信者/着信者	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ディレクトリ番号</b>：コールが行われたディレクトリ番号です。</li> <li>• <b>デバイス タイプ</b>：コールを発信したデバイスのタイプです。</li> <li>• <b>シグナリング IP</b>：コールシグナリングを発信したデバイスの IP アドレスです。IP Phone の場合、このフィールドでは電話機のアドレスが指定されます。PSTN コールの場合、このフィールドでは H.323 ゲートウェイのアドレスが指定されます。</li> <li>• <b>B チャンネル</b>：MGCP ゲートウェイの B チャンネル番号で、適用されない場合は NA となります。</li> <li>• <b>メディア IP</b>：コールの発信元の IP アドレスです。</li> <li>• <b>メディア ポート</b>：コールの発信元のポートです。</li> <li>• <b>デバイス プール</b>：コールの発信元のデバイスプールです。</li> <li>• <b>場所</b>：コールの発信場所です。</li> </ul>
時間範囲の選択	<p>コールを開始した日付と時刻が、Cisco Prime Collaboration Assurance サーバのローカルタイムゾーン（Unified CM が配置されているタイムゾーンではなく）で表されています。最大時間の制限は 7 日間です。</p>
Call Duration(s)	<p>コールの長さ（秒単位）。</p>

Impairment Details	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ジッタ (ms)</b> : コール中のジッタ (ミリ秒) です。</li> <li>• <b>パケット損失</b> : コール中に失ったパケット数です。</li> <li>• <b>隠蔽の秒数</b> : 音声ストリームの開始からの隠蔽イベント (フレームの損失) のあった秒数 (深刻な隠蔽の秒数を含む) です。</li> <li>• <b>深刻な隠蔽の秒数</b> : かなりの量の隠蔽 (50 ミリ秒を超過) が観察された秒数です。</li> <li>• <b>レイテンシ</b> : 遅延</li> <li>• <b>隠蔽率</b> : 総フレームに対する隠蔽フレームの割合です。</li> </ul>
Call Release Code	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Caller Termination Cause</b> : 発信者のエンドポイントでコールが終了した理由を表す文字列です。</li> <li>• <b>Called Termination Cause</b> : コールしたエンドポイントでコールが終了した理由を表す文字列です。失敗したコールの原因コードについては、<a href="#">『Cisco Unified Communications Manager コール詳細レコードアドミニストレーションガイド』</a>の「Call Termination Cause」セクションを参照してください。</li> </ul>
Call Category Names	<p>コールが属するカテゴリのカンマ区切りのリスト。詳細については、<a href="#">コール分類 (9 ページ)</a> および <a href="#">コールカテゴリの作成 (12 ページ)</a> を参照してください。</p>
Call Category Types	<p>コールカテゴリが属するカテゴリタイプのカンマ区切りのリスト。詳細については、<a href="#">コール分類 (9 ページ)</a> および <a href="#">コールカテゴリの作成 (12 ページ)</a> を参照してください。</p>

Call Class	次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Offnet</li> <li>• Onnet</li> </ul> <p>注 詳細については、<a href="#">OffNet および OnNetNet コールを理解する (12 ページ)</a> を参照してください。</p>
Severely Conceal Seconds Ratio (%)	音声品質を測定するメトリック。深刻な隠蔽の秒数 (SCS) と時間の比率です。
Conceal Seconds Ratio (%)	ネットワーク品質を測定するメトリック。隠蔽の秒数 (CS) と時間の比率です。

NAM & Sensor レポートは CSV 形式でエクスポートできます。

レポートをエクスポートするには、レポート ウィンドウの右側のペインにある **[エクスポート (Export)]** ツールボタンをクリックします。 **[すべて (ALL)]** を選択するか、 **[範囲 (Range)]** ラジオ ボタンに値を入力し、 **[OK]** をクリックします。 ファイルをエクスポートしようとしたときにクライアントシステムが応答しない場合は、 [ファイルのダウンロードに関する問題のトラブルシューティング](#) を参照してください。

## センサー レポートを理解する

2つの RTP ストリーム (着信および発信) で1つの音声コールを構成します。センサーは次のようなさまざまな方法で音声トラフィックをキャプチャします。

- Cisco 1040 は、音声トラフィックをミラーリングするように設定されたスイッチポートアナライザ (SPAN) ポートで RTP 音声トラフィックを受信します。Cisco 1040 は、電話機ポートと SPAN ポートがミラーする音声 VLAN に応じて、1つまたは両方の RTP ストリームのみをリッスンして MOS を計算し、データを 60 秒間隔で Cisco Prime Collaboration Assurance に送信します。
- Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM) または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) も、SPAN ポートからデータをキャプチャできます。また、Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM) または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) を設定し、データをキャプチャする他の方法として使用することもできます。Cisco Prime Collaboration Assurance が必要なデータを Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM) または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) が提供するには、Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM) または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) で RTP ストリームの監視を有効にする必要があります。Cisco Prime Collaboration Assurance は、Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM) または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) から 60 秒間隔でデータを取得します。



センサー レポートには、RTP ストリームについてセンサーが1分ごとに計算した MOS を表示します。センサー レポートには、一方だけまたは両方の RTP ストリームがキャプチャされたかどうかに応じて、1分ごとに1行または2行のデータが表示されます。各行に、データを収集したセンサー、関係するエンドポイント、MOS、ジッタ（ミリ秒単位）、およびタイムスタンプが表示されます。

## センサー ストリーム関連データの表示

[センサー ストリーム相関関係（Sensor Stream Correlation）] ウィンドウを起動するには、センサーレポートを生成し、対象とするストリームのグレード値をクリックします。



- (注) [センサー ストリーム相関関係（Sensor Stream Correlation）] ページの代わりに「[サーバが見つかりません]（Cannot find server）」ページが表示された場合は、[センサー ストリーム相関関係ウィンドウの表示](#)を参照してください。

Cisco Prime Collaboration Assurance は、センサーからのデータを相互に関連付けて、Unified CM コール レコードと比較し、次の情報が記載された表を表示します。

- ストリームの概要：センサーレポートに表示されたデータのサブセットです。ストリームの同期ソース（SSRC）ID も表示されます。SSRC は RTP パケットストリームの発信元を識別し、RTP 会議中は一意のままになります。



- (注) リスナー エンドポイントと UDP ポートが RTP パケットのストリームのソースである場合、別の SSRC が送信された RTP ストリームにも割り当てられます。[Sensor Stream Correlation] ウィンドウは、1つの SSRC のデータのみを相関分析します。

- コール レコード：ストリームに関連付けられた Unified CM CDR からの情報です。



- (注) コールがまだ終了していない場合は、表の見出しに「No Call Detail Record found for these streams」と表示されます。

- [Stream details]：SSRC がストリーム サマリー内のセンサーと一致している1つ以上のセンサーの詳細。

次の表には、ストリームの概要テーブルに表示されたデータが示されています。

表 4: Stream Summary

列	説明
---	----

スピーカー/リスナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ディレクトリ番号：次のようにデバイスが Unified Communications Manager によって管理されている場合に表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 適切なクレデンシャルで vCisco Prime Collaboration Assurance に追加されません。</li> <li>• 監視は中断されていません。</li> </ul> </li> <li>• IP アドレス：デバイス タイプに応じて、[IP フォンの詳細 (IP Phone Details)] ページまたは [詳細なデバイス ビュー (Detailed Device View)] が開きます。</li> <li>• UDP ポート：メディアストリームのソースであるトランスポートレイヤポートです。</li> <li>• デバイス タイプ：デバイス タイプまたは次のいずれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• N/A：何らかのエラーにより、Cisco Prime Collaboration Assurance はデバイス タイプを取得できません。</li> <li>• 利用不可：Cisco Prime Collaboration Assurance はこの電話機を初めて認識し、デバイス タイプがまだ認識されていないか、対応する Unified CM が次のとおりとなっています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Cisco Prime Collaboration Assurance に追加されていません。</li> <li>• Cisco Prime Collaboration Assurance に有効なデバイス タイプが提供されていません。</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>
TOS	サービスのタイプ。
コーデック	コーデック名。
SSRC	同期ソース ID：RTP パケットストリームの発信元を識別します。

次の表には、使用できる場合に CDR からのデータが示されています。コールがまだ終了していない場合は、表の見出しに「No Call Detail Record found for these streams」と表示され、行は空白になります。

表 5: Call Record

列	説明
Call Disconnect	コールが切断された時刻。コールが切断されていない場合、ゼロ (0) が表示されます。
Cluster ID	Unified CM クラスタ ID です。
Caller Signaling IP	コールシグナリングを発信したデバイスの IP アドレス。Cisco Unified IP 電話の場合、このフィールドでは電話機のアドレスが指定されます。PSTN コールの場合、このフィールドでは H.323 ゲートウェイのアドレスが指定されます。
Caller B-Channel	MGCP ゲートウェイの B チャンネル番号。適用されない場合は NA。
Called Signaling IP	コールシグナリングを終端したデバイスの IP アドレス。
Called B-Channel	MGCP ゲートウェイの B チャンネル番号。適用されない場合は NA。
Call Duration (s)	コールの長さ (秒単位)。
Caller Termination Cause	発信側がコールを解放したときに表示されます。 (注) 終了した理由は表示されない場合があります。
Called Termination Cause	終端側がコールを解放したとき、またはコールが拒否されたときに表示されます。 (注) 終了した理由は表示されない場合があります。

次の表には、ストリームの概要テーブルと一致する SSRC でストリームからのデータが示されています。

表 6: ストリームの詳細

列	説明
---	----

センサー名	Cisco 1040、Cisco Prime Network Analysis Module (Prime NAM)、または Cisco Prime Virtual Network Analysis Module (Prime vNAM) の表示名です。
時刻	センサーが MOS を計算した時刻。
MOS	サンプル期間中の平均 MOS 値。
Minimum MOS	サンプル期間中の最小 MOS 値。
Primary Degradation Cause	Jitter、Packet Loss、または None (ジッタとパケット損失の値がどちらもゼロ (0) の場合)。
Jitter (ms)	ジッタ値 (ミリ秒単位)。
Packet Loss	パケット損失数。(サンプル期間中に失われた実際のパケット数)。
Sample Duration (s)	分析対象の最初のパケットから最後のパケットまでに経過した秒数。
Max Jitter (ms)	最大のジッタ値 (ミリ秒単位)。
Adjusted Packet Loss (%)	高ジッタが原因で損失したパケットのパーセンテージ。固定長遅延の参照ジッタバッファに基づいて計算されます。この値はネットワーク損失の影響は受けません。
パケット損失 (%)	パケット損失のパーセンテージ。(実際のパケット損失を予測される合計パケットで割り、パーセントで表現)。

#### センサー ストリーム 相関関係 ウィンドウ の 表示

[センサー ストリーム 相関関係 (Sensor Stream Correlation)] ウィンドウを開こうとしたときに「「ページが見つかりません」」などのメッセージが表示された場合、この問題は、ブラウザのプロキシサーバ設定を無効にすることで解決できます。この設定は、[接続 (Connection)] タブの [インターネット オプション (Internet Options)] にあります。

## セッション レポート/会議 レポート

会議レポートを使用して、すべての会議の概要レポートや会議の詳細レポートを表示できます。

**Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP2 以降の場合**

## 会議レポートの前提条件

会議レポートには、次の要件があります。

- Unified CM および Cisco VCS は、Managed 状態にある必要があります。
- MCU などのエンドポイントとコントローラは、Managed 状態にある必要があります。
- デバイスの可視性を「Full Visibility」状態に設定します。
- JTAPI が Unified Communications Manager で設定されている必要があります。Unified Communications Manager で JTAPI を有効にする方法については、「[Cisco Prime Collaboration Assurance のデバイス設定](#)」を参照してください。
- Cisco Prime Collaboration Assurance サーバが、Cisco VCS でフィードバック サーバとして登録されている必要があります。
- 会議の診断と音声電話機能の模擬テストを正しく実行するには、Cisco Prime Collaboration Assurance Service Pack 1 バンドルを適用する前に、CUCM がリストされているバージョンであることを確認してください。詳細については、12.1 Service Pack 1 の『[Cisco Prime Collaboration Assurance でサポートされているデバイス](#)』を参照してください。

次の会議レポートを生成できます。

## すべてのセッション/会議の要約レポート

会議の要約レポートは、進行中および完了した会議に関する情報を提供します。レポートは 4 週間保持されます。

このレポートには、エンドポイント名、デバイス ID、合計使用率、平均継続期間、および最長の会議が含まれます。

また、スケジュールされている会議のスケジュール期間が表示されます。この値は、アドホック会議では「NA」と表示されます。さらに、スケジュールされた時間の使用率もパーセンテージで表示されます。

次の情報も確認できます。

- [IP アドレス (IP address)] : 会議に参加した、選択されたエンドポイントの IP アドレスを表示します。
- [プロトコル (Protocol)] : 会議に使用されたプロトコルを表示します。これは、[エンドポイント (Endpoint)] ペインの [参加した会議 (Participated conferences)] に表示されます。

以下の詳細を確認するには、電話機の可視性が [完全 (Full)] に設定されている必要があります。

次の情報も確認できます。

- [受信したビデオDSCP (Received Video DSCP) ]: 会議で最後に受信したビデオ デバイスの DSCP 値。これは、Cisco Unified IP 電話 8941 と 8945、Cisco DX シリーズ、および Cisco TelePresence TX シリーズにのみ適用されます。
- [受信したオーディオDSCP (Received Audio DSCP) ]: 会議で最後に受信したオーディオ デバイスの DSCP 値。これは、Cisco Unified IP 電話 8941 と 8945、Cisco DX シリーズ、および Cisco TelePresence TX シリーズにのみ適用されます。
- [パケット損失のピーク (Peak Packet Loss) ]: 会議で発生したパケット損失の最高値 (パーセンテージ)。

すべてのセッションの 要約レポートを生成するには、[アシュアランスレポート (Assurance Reports) ]>[セッションレポート (Session Reports) ]> [すべてのセッションの要約レポート (All Session Summary Report) ]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

移行方法 [レポート (Reports) ]>[会議レポート (Conference Reports) ]>[会議の概要レポート (Conference Summary Report) ]。

## Session/Conference Detail レポート

会議詳細レポートには、会議 ID、時間、開始/終了時間、会議のタイプ、ステータス、アラームの重大度などの詳細情報が表示されます。

会議の詳細 レポートを生成するには、 を選択します。[アシュアランスレポート (Assurance Reports) ]>[セッション レポート (Session Reports) ]> [セッション詳細レポート (Session Detail Report) ]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

移行方法 [レポート (Reports) ]>[会議レポート (Conference Reports) ]>[会議の詳細レポート (Conference Detail Report) ]。

## TelePresence エンドポイント レポート

TelePresence レポートを使用すると、エンドポイントの使用率、不参加エンドポイント サマリーを表示できます。

**Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP2 以降の場合**

**Telepresence エンドポイント レポートの前提条件**

Telepresence エンドポイント レポートには、次のものがが必要です。

- Unified CM および Cisco VCS は、Managed 状態にある必要があります。
- MCU などのエンドポイントとコントローラは、Managed 状態にある必要があります。
- デバイスの可視性を 「Full Visibility」 状態に設定します。

- JTAPI が Unified Communications Manager で設定されている必要があります。Unified Communications Manager で JTAPI を有効にする方法については、「[Cisco Prime Collaboration Assurance のデバイス設定](#)」を参照してください。
- Cisco Prime Collaboration Assurance サーバが、Cisco VCS でフィードバック サーバとして登録されている必要があります。
- 会議の診断と音声電話機能の模擬テストを正しく実行するには、Cisco Prime Collaboration Assurance Service Pack 1 バンドルを適用する前に、CUCM がリストされているバージョンであることを確認してください。詳細については、12.1 Service Pack 1 の『[Cisco Prime Collaboration Assurance でサポートされているデバイス](#)』を参照してください。

次のレポートは、TelePresence エンドポイントに対して生成できます。

## Endpoint Utilization Report

Endpoint Utilization レポートにより、最も使用率の高いエンドポイントおよび最も使用率の低いエンドポイントを識別できます。

エンドポイントの平均使用率は、次の式を使用して計算されます。

- システム定義（1 日、1 週間、4 週間）レポート：  
$$\left( \frac{\text{合計使用時間 (分)}}{[\text{最大使用時間} * 60]} \right) * 100$$
- カスタム レポートの場合：  
$$\left( \frac{\text{合計使用時間 (分)}}{([\text{最大使用時間} * 60 * \text{日数}]} \right) * 100$$
  - 1 日：最大使用時間は 10 時間です。
  - 1 週間：最大使用時間は 50 時間です。
  - 4 週間：最大使用時間は 200 時間です。
  - カスタム レポート：最大使用時間は 1 日あたり 7.14 時間です。

スケジュールされた時間の使用率を % で示し、これは、スケジュールされた時間の使用状況をパーセンテージで表しています。

エンドポイントの使用率の設定はカスタマイズできます。カスタマイズするには、エンドポイントモデル（特定のモデルのエンドポイント）を選択して、[使用率の変更（Change Utilization）] ボタンをクリックします。1 日の作業時間数と 1 週間の作業日数を選択できます。

エンドポイント使用率レポートを生成するには、[アシュアランス レポート（Assurance Reports）] > [Telepresence エンドポイント レポート（Telepresence Endpoint Reports）] > [エンドポイント使用率レポート（Endpoints Utilization Report）]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [レポート（Reports）] > [Telepresence エンドポイントレポート（Telepresence Endpoint Reports）] > [エンドポイント使用率レポート（Endpoint Utilization Report）]。

## No Show エンドポイントの要約レポート

No Show Endpoints Summary レポートには、スケジュールされた会議に参加しなかったエンドポイントに関する情報が表示されます。このレポートは、スケジュールされて完了した会議データに基づき生成されます。

エンドポイント表示なしサマリー レポートを生成するには、次のオプションを選択します。  
[アシュアランス レポート (Assurance Report)] > [Telepresence レポート (Telepresence Report)] > [エンドポイント使用率レポート (Endpoint Utilization Report)]。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

エンドポイント表示なしサマリー レポートを生成するには、次のオプションを選択します。  
[レポート (Report)] > [Telepresence エンドポイント レポート (Telepresence Endpoint Reports)] > [No Show エンドポイントの要約レポート (No Show Endpoint Summary Report)]。

## [CUCMレポートの起動 (Launch CUCM Reports)]

[CUCMレポートの起動 (Launch CUCM Reports)] では、Cisco Unified Communications Manager クラスタのレポート ページをクロス起動できます。

次に進む: [CUCMレポートの起動 (Launch CUCM Reports)] をクリックして、クラスタ名をクリックして Cisco Unified Reporting アプリケーションを開きます。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

選択 [レポート (Reports)] > [CUCMレポートの起動 (Launch CUCM Reports)]。

## その他のレポート

その他のレポート、UCM/CME Phone Activity レポート、Voice Call Quality Event History レポートなど、さまざまなレポートを使用できます。

## UCM/CME Phone Activity Reports

UCM/CME Phone Activity レポートは、過去 30 日間にステータス変更のあった、オーディオおよびビデオ電話に関する情報を提供します。

Cisco Prime Collaboration Assurance を Enterprise モードで導入した場合、Export Audio Phones レポートを除く Phone Activity レポートには、ドメイン名が表示されます。

Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、Export Audio Phones レポートを除く Phone Activity レポートには、顧客名が表示されます。

利用可能な Activity レポートは、次のとおりです。



## Endpoint Move レポート

[Endpoint Move] レポートには、過去 30 日以内に移動された IP/ビデオ エンドポイントの詳細が表示されます。また、移動前後に使用されている内線、Cisco Unified CM アドレス、スイッチのアドレス、スイッチ ポートを表示します。

[Endpoint Move] レポートには、IP/ビデオ エンドポイントの移動が発生した時間ではなく、検出された時間が表示されます。

[Endpoint Move] レポートを生成するには、[レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [Endpoint Move] の順に選択します。



(注) [Endpoint Move] レポートは、CDP をサポートしないビデオエンドポイントはサポートしていません。

## Endpoint Audit レポート

Endpoint Audit Report には、管理されている IP/ビデオ エンドポイント ネットワーク内の変更が表示されます。

たとえば、このレポートには、ネットワークで追加または削除された IP/ビデオ エンドポイント、IP またはビデオ エンドポイントのステータスなどが表示されます。たとえば、エンドポイントのステータスは、エンドポイントが Cisco Unified CM から登録を解除されたときに変更されます。

Endpoint Audit Report を生成するには、[レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [UCM/CME Phone Activity Reports] > [エンドポイントの監査 (Endpoint Audit)] の順に選択します。



(注) 24 時間以上前に CUCM から登録解除されたエンドポイントは、Audit Report に [Removed (削除済み)] と表示されます。レコードの場合、登録されている間に CUCM から削除されたエンドポイントは、Audit Report に次の 24 時間は [未登録 (Unregistered)] と表示され、それ以降は [Removed (削除済み)] と表示されます。これらは、削除後に最初の CDT 検出を行った後には、Cisco Prime Collaboration Assurance インベントリから削除されることに注意してください。

## Endpoint Remove レポート

[Endpoint Remove] レポートには、過去 30 日以内に削除されたエンドポイントが一覧表示されます。

[Endpoint Move] レポートを生成するには、[レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [Endpoint Move Report] の順に選択します。

## Endpoint Extension レポート

Endpoint Extension Report には、過去 30 日以内に内線番号が変更されたエンドポイントが一覧表示されます。

Endpoint Extension Report を生成するには、[レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [Endpoint Extension Report] の順に選択します。



(注) Endpoint Extension Report は、Cisco ワイヤレス IP 電話 7920 ではサポートされていません。

## Audio IP Phone Activity レポートの対象期間を理解する

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

Audio IP Phone レポートまたは Video IP Phone Activity レポートを生成する場合は、次のそれぞれがどの時間帯の地域に属しているかによってレポートの結果が影響を受ける場合があります。

- クライアントシステム：Cisco Prime Collaboration Assurance は、クライアントシステムの日時に基づき、Phone Activity レポートの期間（レポートに応じて、直近 24 時間から直近 7~30 日まで）を計算します。
- Prime Collaboration システム：Cisco Prime Collaboration Assurance は、内線番号の変更など、Cisco Prime Collaboration システムが検出した変更の時間に基づき、一部の監査を記録します。
- Cisco Unified Communications Manager：Cisco Prime Collaboration Assurance は、電話機の移動など、Cisco Unified CM が検出した変更の時間に基づき、一部の監査を記録します。

これらのシステムに 1 つでも同じ時間帯に属していないものがある場合は、Phone Activity レポートを生成および表示するときに、時間帯の差を考慮に入れる必要があります。



(注) Cisco Prime Collaboration Assurance システムの監査日時と Audio IP Phone または Video IP Phone Audit レポートに表示される監査日時が一致しない場合は、ネットワーク内のすべての Cisco Unified CM が同期するように設定されていることを確認します。

## Cisco Unified CM がダウン時に電話機のステータスをトラッキング

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

バックアップが設定済みの Cisco Unified CM がダウンすると、音声やビデオ IP フォンは Cisco Unified CM のバックアップにフェールオーバーします。

Cisco Prime Collaboration Assurance は、バックアップに登録された電話機の監査レコードを保存し、これらの変更されたステータスは IP Phone and Video Phone Audit レポートに含まれます。

Cisco Prime Collaboration Assurance は、次の場合には監査レコードを保存しません。

- Cisco Unified CM クラスタ全体がダウンする。  
バックアップが設定されていない Cisco Unified CM がダウンする。

そのため、このような Cisco Unified CM に登録された電話機のステータスが変更された状況では、Audio IP Phone Status and Video IP Phone Activity レポートには含まれません。

## Voice Call Quality Event History Reports

次の項目に基づき、[Voice Call Quality] イベントの [Event History] データベースを検索できます。

- MOS
- 接続先
- コーデック
- 電話機モデル
- センサー（Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードでインストールした場合には適用されません）
- 日付
- エクスポート

Call Quality Event History レポートを生成するには、[アシュアランス レポート (Assurance Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [音声コールの品質のイベント履歴レポート (Voice Call Quality Event History Reports)]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [Voice Call Quality Event History レポート (Voice Call Quality Event History Reports)]。

Voice Call Quality Event History レポートは、検索基準に基づき最大 2000 件の記録を一覧表示するスクロール可能な表です。

2,000 レコードを超えてデータベースの内容を表示するには、の順に選択します。[アシュアランス レポート (Assurance Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [音声コールの品質のイベント履歴レポート (Voice Call Quality Event History Reports)] > [エクスポート (Export)]。1,000 を超えるレコードが検索基準に一致する場合、ポップアップウィンドウに一致するレコードの合計数がレポートされます。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

選択 [レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [Voice Call Quality Event History レポート (Voice Call Quality Event History Reports)] > [エクスポート (Export)]。

Internet Explorer ブラウザで Voice Call Quality Event History レポートをエクスポートする場合、**[Windows セキュリティ (Windows Security)]** ポップアップ ウィンドウが表示し、クレデンシャルの入力を要求される場合があります。**[Windows セキュリティ (Windows Security)]** ポップアップ ウィンドウを閉じたとしても、レポートはダウンロードされます。

**[Save at (保存先)]** フィールドに、Cisco Prime Collaboration Assurance がインストールされているサーバでレポートの保存先を入力します。デフォルトの場所は `/opt/emms/cuom/ServiceQualityReports` です。



(注) デフォルトの場所にファイルを保存するようにエクスポート設定を構成している場合は、必ず Cisco Prime Collaboration Assurance サーバにログインして、**[エクスポート設定 (Export Settings)]** ページで入力したフォルダーを作成し、ユーザのフォルダに書き込み権限を与えます。これらのタスクを実行しないと、Cisco Prime Collaboration Assurance はエクスポートファイルを作成できません。

**[メール送信先 (E-mail to)]** フィールドに、1 つまたはコンマで区切られた複数の完全な電子メールアドレスを入力します。

レポートをダウンロードするには、**[レポートのダウンロード (Download Report)]** をクリックします。

Cisco Prime Collaboration Assurance を Enterprise モードで導入した場合は、グローバルセレクトタ (ドロップダウン) で選択した特定のドメインの Call Quality Event History レポートのみを表示できます。ただし、エクスポート オプションを使用してレポートをエクスポートした場合、レポートはグローバルセレクトタで選択したドメインに基づきフィルタリングされません。

Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、Call Quality Event History には名前など、お客様の詳細情報が含まれます。グローバルセレクトタ (ドロップダウン) で選択した特定のお客様のレポートを表示できます。ただし、エクスポート オプションを使用してレポートをエクスポートした場合、レポートはグローバルセレクトタで選択したお客様に基づきフィルタリングされません。また、このモードでは、センサーに基づいた Voice Call Quality イベントの、イベント履歴データベースを検索することもできません。

## その他のレポート

Cisco Prime Collaboration Assurance を Enterprise モードで導入した場合、その他のレポートでは、CTI アプリケーション、Cisco Analog Telephone Adaptor (ATA) デバイス、Cisco 1040 センサーに関する情報を提供します。



(注) Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、Cisco 1040 センサーのレポートを生成することはできません。

これらのレポートを生成するには、次のオプションを選択します。[アシュアランスレポート (Assurance Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [その他のレポート (Other Reports)] をクリックして、レポートを選択します。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

選択 [レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [その他のレポート (Other Reports)]。

## CTI Applications レポートの生成

CTI アプリケーション レポートには、Cisco Unified CM に登録されている CTI アプリケーションの一覧が報告されます。

Cisco Unified CM には、次のアプリケーションが CTI デバイスまたは CTI ポートとして登録されます。

- Cisco Personal Assistant
- Cisco Customer Response Applications
- Cisco IP Contact Center
- Cisco Emergency Responder

## ATA Devices レポート

ATA Devices レポートは Cisco Unified CM に登録されている ATA デバイスについての情報を提供します。

## Cisco 1040 Sensors レポート

Cisco 1040 センサー レポートは、ネットワークに展開された Cisco 1040 センサーに関する情報を提供します。Cisco 1040 センサー レポートを生成する前に、「[Cisco Prime Collaboration Assurance レポートを生成するための前提条件](#)」で前提条件を確認してください。



---

(注) このレポートは、Prime Collaboration を MSP モードでインストールした場合は使用できません。

---

IP フォンの Web インターフェイスがアクセス可能になっている場合は、次のいずれかのハイパーリンクをクリックすることにより、Cisco 1040 Sensors レポートから Web インターフェイスを開くことができます。

- 内線番号
- MAC アドレス
- IP アドレス

## 会議デバイスのビデオ ポートの使用率レポート

このレポートは、会議デバイスの 1 時間単位の使用率に基づいて生成されます。

### Average Utilization

- 1 日：平均使用率 (1 時間目 + 2 時間目 + ... + 24 時間目) / 24。
- 1 週間：1 週間の毎時間の平均使用率を合計し、(7 x 24) で除算します。
- 4 週間：4 週間の毎時間の平均使用率を合計し、(7 x 24 x 4) で除算します。
- カスタム期間：カスタム期間中の毎時間の平均使用率を合計し、(24 x カスタム期間の日数) で除算します。



(注) 使用率は、100% を超えた場合でも 100% と表示されます。

### Peak Utilization

- 1 日：24 時間の各時間における個々のピーク値からピーク使用率を分析します。
- 1 週間：7 \* 24 時間の各時間における個々のピーク値からピーク使用率を分析します。
- 4 週間：7 \* 24 \* 4 時間の各時間における個々のピーク値からピーク使用率を分析します。
- カスタム期間：カスタム期間中の各時間における個々のピーク値からピーク使用率を分析します。

会議デバイスの使用率レポートを生成するには、を選択します。[アシュアランス レポート (Assurance Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [他のレポート (Other Reports)] > [会議デバイスの使用率レポート (Conferencing Device Utilization Report)]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [レポート (Reports)] > [その他のレポート (Miscellaneous Reports)] > [その他のレポート (Other Reports)] > [会議デバイスの使用率レポート (Conferencing Device Utilization Report)]。

[平均使用率 (Average Utilization)] または [ピーク使用率 (Peak Utilization)] 列の値をクリックすると、[ビデオポートの使用率の詳細 (Detailed Video Port Utilization)] グラフが開きます。表示するデータとして、時間あたりの平均使用率、ピーク使用率、または実際のデータ ([すべて (All)] をクリック) を選択できます。また、スライダを使用して短い時間間隔 (1 分間など) を選択して、その時間内の実際のデータを確認することもできます。

## スケジュール済みレポート

スケジュール設定されたレポートは、[起動パッドのレポート (Report Launch Pad)] からスケジュールすることができる、使用率およびインベントリに関するレポートです。スケジュールリ

ング設定に従ってレポートを生成できます。ダウンロードしたり、設定済みの電子メール ID に送信することができます。これらのレポートは、CSV および PDF 形式にエクスポートできます（ただし、CSV 形式のみでエクスポート可能な Conference Detail レポートは除く）。これらのレポートのデータは、30 日間のみ利用できます。

これらのレポートは、デフォルトでは有効になっていません。レポートは、その場で生成するか、スケジューリングを有効にして事前に定義された日に生成できます。

[レポート (Reports)] -> [スケジュール済みレポート (Scheduled Reports)] -> [レポート (Reports)] の順にクリックします。

次のスケジュール済みレポートを使用できます。

レポートタイトル	説明
Utilization Report ([レポート (Report)] セレクタで [使用率 (Utilization)] > [エンドポイント (Endpoint)]、[エンドポイントの非表示 (Endpoint No Show)] の順に選択すると、Monthly Utilization および Monthly No Show Report が表示されます。	
Monthly Utilization Report	エンドポイントの使用率について、月ごとに集計したレポートです。この集計値は、すべての月の使用率 / 12 によって計算されます。
Monthly No Show Report	スケジュール設定された会議には参加していないエンドポイントの、集計された月次レポートを提供します。平均の集計値は、すべての月にわたる不参加割合の合計 / 12 として計算されます。
Conference Detail レポート	すべての完了した会議で、会議の詳細統計を提供します。
Inventory Report	
Managed Devices Report	管理されたデバイスに関する情報を提供します。不明なデバイスの場合は、IP アドレスのみが表示されます。このレポートを使用して、クレデンシャルが更新されたデバイスを検索します。
Unmanaged Devices Report	管理されていないデバイスに関する情報を提供します。このレポートを使用して、クレデンシャルの更新が必要なデバイスを特定します。

レポートタイトル	説明
エンドポイント	<p>[エンドポイントの診断 (Endpoints Diagnostic) ] ページで表示されるとおり、エンドポイントに関する情報を提供します。詳細については、<a href="#">エンドポイントの診断ダッシュボード</a> セクションを参照してください。</p> <p>(注) Cisco Unified Communications Manager (Call Manager) の説明は、Endpoint Report のエンドポイント名列にマップされます。</p> <p>[エンドポイント名 (Endpoint Name) ] と [ユーザ名 (User Name) ] 列の関連付けは、Cisco Jabber または Client Services Framework (CSF) の一意なデバイスの識別に役立ちます。</p>
<b>Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合</b>	
Endpoint(s) Report ([レポート (Report) ] セクタで [インベントリ (Inventory) ] -> [エンドポイント (Endpoint) ] の順にクリック) には、Endpoints Audit、Endpoints Move、Endpoints Remove、Endpoints Extension Audit のスケジュール済みレポートが表示されます。	
	<p><b>Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 SP3 以降の場合</b></p> <p>Endpoints Audit、Endpoints Move、Endpoints Remove、Endpoints Extension Audit レポートをスケジュール設定し、生成されたレポートを、電子メール通知経由で指定の電子メールIDに送信できます。生成されたレポートには、過去1日の詳細が一覧化されている必要があります。</p> <p>Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、[顧客 (Customer) ] 名の列があります。</p>
Event History Report	
すべてのイベント	過去1日、1週間、1か月の間に発生したすべてのイベント履歴が提供されます。





- (注) Scheduled Utilization レポート (Monthly Utilization、Monthly No Show、Conference Detail レポート) は、ビデオ電話機と TelePresence ポイントに適用できます。これらのレポートに示されるエンドポイントの詳細は、購入したライセンスに基づいて設定されます。

## スケジュールされたレポートの生成

目的に応じて、レポート期間、レポート生成日と生成頻度を定義できます。

スケジュール レポートを生成するには、次の手順を実行します。

**ステップ 1** [レポート (Reports)] ペインからレポートを選択します。

**ステップ 2** [Report Details] ペインの下にある [Settings] タブをクリックし、[Enable Scheduling] をクリックします。

**ステップ 3** [Scheduler] および [Settings] ペインのオプションを使用して、レポート生成をスケジュールリングします。

**ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- [保存 (Save)] をクリックします。
- その場でレポートを生成するには、次の手順を実行します。
  - 生成するレポートの横の [今すぐ実行 (Run Now)] をクリックします。
  - [Report Details] ペインで [Run History] タブをクリックします。
  - レポートをダウンロードします。

カスタマイズされ、スケジュールされたレポートを作成するには、左の隅にあるレポートのクイック表示からレポートを選択し、[レポート (Reports)] ペインの下にある [新規 (New)] をクリックします。必要な情報を入力し、[Submit] をクリックします。実行レポートのインスタンスは、[Job Management] ページの下のジョブとしてキューに格納されます。これらのジョブの管理とモニタリングは、[管理 (Administration)] ページ (から可能です。[システム管理 (System Administration)] > [ジョブ管理 (Job Management)] )。

## 2,000件を超えるレコードを含むレポートのデータへのアクセス

Cisco Prime Collaboration Assurance のレポートには、最大 2,000 件のレコードが表示されます。レポートの生成時に 2,000 件を超えるレコードが返された場合、Cisco Prime Collaboration Assurance は、レポートの表示前に情報メッセージを表示します。

この場合、次のように対処できます。

- フィルタの詳細な条件を指定し、生成されるレポートのレコード数を減らす。
- レポートデータを CSV ファイルにエクスポートして、追加のレコードにアクセスする。エクスポート ウィンドウを開くには、レポート ウィンドウの右上隅にある [Export] アイコンをクリックします。CSV ファイルに最大 30,000 レコードをエクスポートできます。



(注) ファイルをエクスポートしようとしたときにクライアントシステムが応答しない場合は、「[ファイルのダウンロードに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

## ファイルのダウンロードに関する問題のトラブルシューティング

Cisco Prime Collaboration Assurance からレポートまたは他のデータをファイルにエクスポートしようとしたときに、[エクスポート (export) ] ダイアログボックスまたはエクスポート ファイルを保存するよう指示するウィンドウが表示されない場合は、次の手順を使用して問題を解決します。

### 手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	Internet Explorer でセキュリティのレベルを中以上に設定すると、ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示するオプションが無効に設定されます。PDF または CSV ファイルをクライアントシステムにダウンロードしようとしたときに、そのシステムに Adobe Acrobat Reader や Microsoft Excel がインストールされていない場合は、何も起きません。その PDF ファイルまたはスプレッドシートは表示されず、ファイルの保存場所を指定するウィンドウも表示されません。ファイルのダウンロードウィンドウを表示できるようにするには、デスクトップで次の手順を実行します。	
ステップ 2	Internet Explorer を使用しており、ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示するオプションが有効にされていても、ファイルの保存場所を指定するウィンドウが表示されない場合は、次の手順を実行してください。	